

## 本の紹介

玉城 英彦著

新渡戸稲造～日本初の国際連盟職員～

彩流社 2200円

名護高等学校で青春時代を共にした、玉城英彦氏の最近の著書を紹介したい。先ずもって、歴史上の膨大な資料を駆使した労作に、彼の歩みの重さをしのばせる。

彼は、長年にわたり世界保健機関（WHO）を足場に世界を駆けめぐった。現在、北海道大学名誉教授・客員教授の任にあり、名桜大学の共同研究員として、沖縄での子弟の教育にも関与している。彼の教育の姿勢は、一貫してグローバルな人材の育成にある。

彼と同期の私は、公務員生活も定年を迎え、現在、「がん」の診療から一転して老人保健施設でお年寄りの方々の診療に従事している。老健施設の診療の合間をぬって、国立療養所沖縄愛楽園の患者さんの診療にも携わっている。

愛楽園に向かう道中の羽地内海の空間は、東北の仙台松島の絶景に、南国の太陽が濃淡の陰影を重ねたかのような陰をおとし、深いため息を誘う。日常の喧騒の隙間に、癒しの空間が構成されている。その中に、ひととき太陽の光が色濃く浮かび上がらせている島が、著者玉城英彦氏の出生の地、古宇利島である。

彼の視点は常に、国境を越えた「グローバル」なものにとらえ方にある。しかし、足下は常に、沖縄本島北部、古宇利島の地にあり、そこから一步を踏み出している。

「古宇利島（フィジマ）への手紙～古宇利島の思い出を辿って」（新星出版：2007年）を踏み台にして、「世界へ翔ぶ～国連機関をめざすあなたへ」（彩流社：2009年）、「ともに生きるためのエイズ～当事者と社会が克服していくために」（彩流社：2010年）、「社会が病気をつくる～持続可能な未来のために」（角川学芸出版：2010年）、「手洗いの疫学とゼンメルワイスの闘い」（人間と歴史社：2017年）と精力的な執筆活動が続き、今回の「新渡戸稲造：日本初の国際連盟職員」（彩流社：2018年1月）の出版につながっている。

新渡戸稲造という人物の描写をとうして、グローバルな思考、視点の大切さと、その問題点を指摘することによって、現代の若者の心を刺激し、若者の背中を押して「世界へ翔ぶ」ことを促している。

「グローバル」と「ローカル」であることを対比して、自分なりに本書に描かれた著者の意図を探ってみた。それも、極めてローカルな馬小屋での誕生から、普遍性を、絶対性を説いたキリストの十字架の意味を噛みしめることによって。

聖書に記されたキリストの処刑の場面には、3つの十字架が描かれている。キリストを中央に、左右に罪人を配置している。片やキリストを罵る「絶望」の人間像があり、片や、悔い改めた人間の「希望」の姿がある。この3つの十字架の背後に4番目の十字架が隠されているとの解釈ができる。この世に生を受けた人間の、個々が背負う十字架である。

十字架の縦の線、横の線の長さ、十字架の重さは個々に異なる。極端に重い十字架を背負うこともあるが、その重さに耐えられないことは無いとの楽観主義が根底にある。

十字架の重さだけではなく、土台にしっかりと固定された十字架と大海原に漂う十字架が想定できる。政治の世界がまさにその場である。平和な世界を理想に描きつつ、着実に改革を進める「政治家」と人間の欲望を刺激しつつ、金銭という「餌」をちらつかせなが

ら票を集める「政治屋」の姿である。

政治屋のもくろむ、戦争への流れは絶たなければならない。確固とした土台（ローカル）のもとに、時流に流されることのない十字架を背負いつつ歩むことを忘れずに。

時の政局が、過去の世界大戦へと突入した流れを臭わす。新渡戸稲造という人間像を振り返ることによって、時の流れを変えることを意図とした著作と考えたい。

介護老人保健施設「あけみおの里」

施設長 石川清司

# 来沖59年 米人神父の歩み

沖 縄

「ぐすーよー ちゅーろがな  
びら 沖縄へ来て もろくぐ60年  
です これまで生きてきて良かった  
沖縄へ来て良かった あなた  
に田舎へ良かった」と着紙にあ  
るように 現在86歳 ニューヨー  
ク出身の沖縄をよなく愛し今や  
「ちゅーろがな」となつたラ  
サル神父の自分史である。

着紙の笑顔がとてもいい。19  
58年9月、27歳で青年宣教師と  
して沖縄の地を踏んだからの歩み  
を、神父と田舎つて50年となる石  
川清司氏が纏束している。本書は  
未知の地で宣教師として生きる人  
間の背中を押す「力」は向か、そ  
して沖縄の地に根を下ろす、その  
土壌は向か、ま探る纏束の思いが  
神父とかわりを持つ多くの人々  
の纏束とともに綴られている。

揺るぎない信仰を土に、開拓  
者の魂、改革の精神を持った神父  
が、沖縄の地を拓きながら使命を  
探し、「平和の種まき人」として  
実践してきた活動は数知れない。

「平和をあたらず人は幸いであ



ぐすーよー「ラサル」でーびる ラサル・パーソンズ著 石川 清司編

る」という言葉の言葉を養育する。  
彼は沖縄で出会った人々から非  
暴力「ゆるしあつ心」「小さな自  
然の手に耳を傾けること、環境を  
考える姿勢」を学んだと語ってい  
る。

20年の歴史を持つ「沖縄・生と  
死と暮らさなつめる会」の代表と  
して、多くの人々と交流を続け、  
現在も60年前と変わらぬ情熱  
と、まぐとらほを交えた明朗な  
語り口で会員を導いている。

「キーンな キーンな し  
わまんげー」と場を和ませ、エ  
モーションあふれるエピソードに思  
はず失笑してしまう場面もある。天  
性の深淵は神様からの賜物に違  
いない。彼は自分がどれだけ「無  
償の愛」をもちこけているかに驚愕  
くことで、他者へ愛を届けること  
が出来ること述べている。

困難な中にあつても「…でも私  
はゆるし」という人本主義の語を  
引用し、『被抑圧者の教養学』(ペ  
ドロ・アソシエ)から「対話」  
の重要性を講義している神父の生  
きまじい、私とも争むたいと思  
う。(大澤勲子・国立病院機構沖  
縄病院副院長)

沖縄多才社・1620円  
LASALLE・PARSONS 1  
930年米ニューヨーク州生まれ。宣教  
師になり58年沖縄へ。沖縄人権協会理事  
などを務め、「沖縄・生と死と暮らさな  
つめる会」代表として、いわ・まよし介  
護老人保健施設「あけみのおの里」施設長